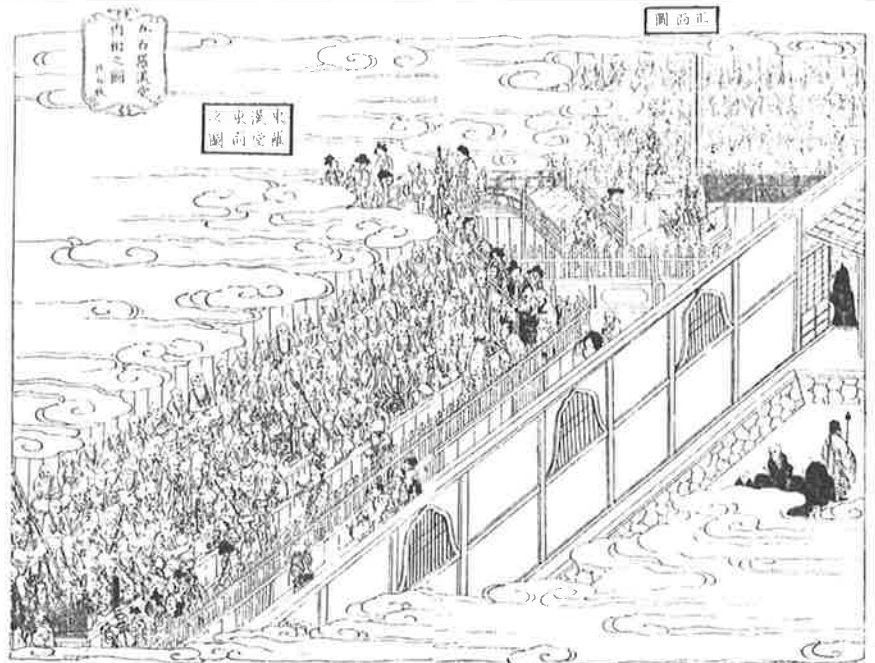


# 水彩都市を歩きから人々

江東区深川江戸資料館

江東区は、運河が縦横に走る水の都です。

河川交通は陸路に行くより早く目的地に到着できるため、物資の輸送だけでなく人々も多く利用しました。船で行く川の風情は人々を楽しませ、独特の情緒を醸し出していきます。たくさんの人が行きかう江戸時代の河川交通を見ていきましょう。



『江戸名所図会』五百羅漢

## 船番所と川柳

中川船番所は、小名木川を通り江戸へ出入りする川船の人と積み荷を改める番所です。当初は隅田川口の万年橋際に置かれていましたが、寛文元年(1661)中川口に移転しました。この時の「川番所の高札」では、夜間の出船の禁止、通行の際の作法、女性の通行禁止、武具類・囚人・手負い・死人の取締などについて定められています。

中川は 同じあいさつして通し  
通ります通れ 葛西のあふむ関

こうした規制は徐々に形式化して行ったようで、残されている川柳から、「通ります」「通れ」という挨拶で通行が許可された様子がわかります。

真間の紅葉は中川の灯が若勞

遠出をしてしまうと、門限のある船番所は気になる存在だったのでしょう。

また、通行が禁止されていた女性は手前で船から上がり、陸路で番所を通過したようです。

## 訪れる人々

江戸近郊の行楽地亀戸・向島方面は、寺社の縁日や四季折々の花の盛りには、訪れる人で賑わいました。

また鄙<sup>ひな</sup>びた土地であった中世の江戸の名所は、浅草や梅若塚など隅田川の沿岸に始まります。徳川家康の江戸入り以降、新しい「江戸の名所」が生まれますが、これらも自然の地形を生かした所が多く、水と行楽とは切っても切れない関係にありました。8代将軍徳川吉宗の時代に墨堤<sup>ぼくてい</sup>(隅田川の土手)に桜が植えられ、江戸の人々のための行楽地が人為的に整えられていきます。後に「春のうららの隅田川」と歌われる川面を船で行く花見の風情は格別だったと想像することができます。

江戸の人々が「名所巡り」を楽しむ風習は、宝暦～天明期(1751～88)を経て文化～文政期(1804～29)に最高潮に達します。この時期、富岡八幡宮を中心とした盛り場や、亀戸の萩、梅、藤などは、大変な賑わいを見せるようになります。

これらの名所は今日も江東区の観光スポットとして注目されています。

## 将軍吉宗と鷹狩り

八代将軍吉宗は、五代将軍綱吉のときに廃止された鷹場を再興しました。鷹狩りは、猛禽類の鷹を使って鳥類を捕る狩りの一種で、将軍や大名が「鷹場」という指定された場所で行なったものです。江東地域は葛西筋の鷹場に含まれ、亀戸や砂村で鷹狩りが行なわれています。

将軍は、これらの鷹場へ御座船で訪れ、河岸には専用の乗船場が設けられていました。亀戸へは縦川を通り天神橋・本所五ツ目などの「御上り場」から、砂村方面へは小名木川を通り又兵衛新田・八郎右衛門新田の「御上り場」から上陸しました。船中で鉄砲や網による猟も楽しんでいたようです。

ふだんも「鳥見」という役人が鷹場を巡り、多くの人たちが行きかいました。

## 蒸気船の時代

明治になると、大量輸送を可能にする近代的な交



『江戸名所図会』猿江泉養寺の池の蓮花

通機関としての蒸気船が登場します。江東区内では、明治4年（1871）に利根川丸が新大橋際から中田宿（千葉県）まで就航しました。また、「ぽんぽん蒸気」として親しまれた通運丸は、明治10年、深川扇橋から小名木川を通り生井河岸（栃木県）まで就航しました。

明治10年代の利根川筋の川汽船は、多くの業者が開業して、互いに競い合っている時期です。これらは、鉄道の開通の遅れていた

江東地域の人々の大切な交通手段となりました。また、隅田川を航行する蒸気船は、安価な庶民の足で、「一銭蒸気」と呼ばれました。蒸気船の思い出は、随筆や文学作品にしばしば登場し、人々のくらしと密接にかかわってきたことが偲ばれます。

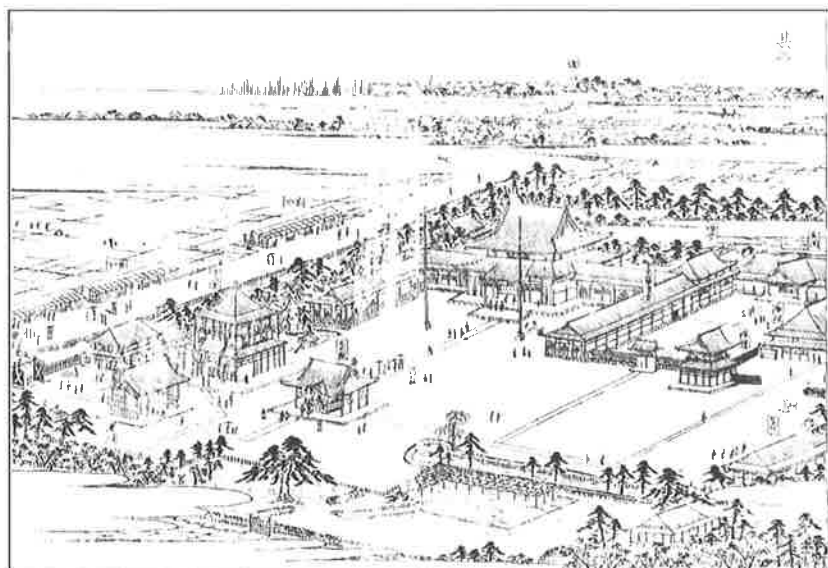
## 水辺の情緒の終焉と復活

水に恵まれた環境は、しかし同時に水の災害を受けやすい環境でもありました。度重なる水害、地盤沈下などの問題が次第に顕著になり、高度経済成長といわれた昭和40年代から川は次々埋め立てられて消滅して行きました。また、水害から住民を守る

ために作られた高い護岸は、川と人々の生活を切り離してしまいました。陸上交通のめざましい発展により、運送の手段としての川も、その使命を終えていきました。

しかし、近年、やすらぎの空間として水辺の環境が見なおされ、親水公園としてよみがえっています。

緑と水に彩られた近年の名所に、区外からもたくさんの人々が訪れています。



『江戸名所図会』洲崎弁天